九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

政治社會科學の方法

今中, 次麿
九州大学 : 教授

https://doi.org/10.15017/1233

出版情報：法政研究. 17 (1/4), pp.3-33, 1950-03-31. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：

政治社會科學の方法

今中次麿

一

科學は現象の必然性のうちに、恒常性と法則性を見出すことによつて成り立つ。意識そのものによつて構成せられない自然現象においては、科學は、かような意味において容易に成り立つ。しかしながら、意識は現象としての社會現象においては、科學は、決して、かように簡單には成立しない。

社會現象は、そもそも、いかなる現象であるかを、先ず一應、考察して見る必要があろう。

社會現象はしばしば、個人現象と十分に識別せられていない。社會現象は、意識的現象であるのみならず、更に、多數個人の集群現象である。或は個人と個人との相互關係であり、或は多數の個人の結合的社會構造である。

社會現象は、したがつて、個人なしには成立しないけれども、個人だけでは成立しない。故に、社會は「個人の集群現象」であるとせられる。

しからば、社會における、意識的現象の源泉は、どこにあるかと云えば、いうまでもなく、個人のみが意識の主体であつて、社會そのものは、決して、それ自体としての、固有の意識を有するものではない。

したがつて、社會は、社會に參加する個々人が、各自その意識をもつて行動するところの、その效果として成立しているにすぎない。

かくて、ここに個人意識は、社會的制約をうけることとなるであろう。すなわち、社會現象が成立するためには、數多の個人意識が、互に制約的關係をもたざるを得ない。この制約關係によつて、各個人の本來の意識は、決して、自由に實現され得るものとはならない。ここに意識と意識との制約關係が成立する。社會現象は、かような意識の制約關係によつて成り立つ。

かような、意識の社會的制約によつて、社會現象は、それに參加せる、何れの個人の意識でもないところの、個々人の意識の關係的效果として、實現せられる。

社會の科學的研究においては、かような他の個人意識に關係をもたないところの、孤立的個人意識が、したがつて問題外に置かれる。かような孤立的な個人的領域は、社會の科學的研究の外に置かれる。恐らく、かような個人的領域は、生理學的研究、哲學的研究乃至は心理學的研究の領域に屬するものと思われる。

もとより、生理學においては、個人を有機体として研究するであろうし、哲學においては、かような孤立的個人意識を、價値的水準において、考察するであろうし、これに反して、心理學においては、それを感覺的過程において觀察するであろう。

社會の科學は、集群關係を研究領域とするところから、かような、生理學的法則や、哲學的價値や、感覺的心理學的過程は、これを問題としない。

そこでまた、社會の科學においては、意識に反映する感覺の作用についても、これを問題とはしない。われわれ人間の個人的意識が、物質的存在や、肉体的存在性や、または心理的存在に制約されることは、經驗的に明らかな事實であるけれども、社會の科學は、意識に反映する、かような自然的要素を問題にはしない。それは、生物學的・心理學的乃至は風土的（地學的）反映の觀察として、それぞれ別個の研究領域を構成するものであり、それは決して、社會の科學的研究領域に、持ち込まるべき性質のものではない。

社會の科學としての政治科學に對して、これまで、Geo-, Physico-, Anthropo-, そして更にしばしば、Psycho-Politik が主張されてきたということは、まさに、かような點についての誤謬からであつて、それは、方法論上の誤解にもとずくものであつた。もとより、更に綜合的な、「俗流唯物科學」において、意識の「物質的」基礎からの反映的制約をきわめることによつて、社會の科學を構成しようとする多くの努力が、これまでになされてきたことは事實であるが、それは、すべて誤謬であつたと云わねばならない。エルベシウスの「人間機械論」から、オストワルドの「文化哲學」に至る唯物的社會科學、並びに「有機体說」や「心理學的方法」の名において、絶えず誤謬がおかされてきたことを、われわれはよく知つているであろう。

社會の科學において、とりあげられなければならない意識現象は、かような、「感覺的意識」や「心理學的意識」でなしに、價値的な内容においての、意識と意識との社會的關連に外ならないのである。

もとより、ここには、社會の科學的研究領域が、「感覺的」意識でなしに、「價値的」意識のそれであるというのであつて、價値的意識が感覺的意識と沒交涉に成立しているというのではない。

上にあげたような「人間機械論」や社會の「心理學的方法」による研究の誤謬は、研究對象としての社會のうちに横たわる價値意識の特性を無視して、社會と自然との研究方法の同一性を主張したところに存しているのであつて、價値意識と感覺意識との關係を無視したことにあるのではない。むしろ、このような誤謬は、先驗的認識論を主張したり、意思自由論を主張したりする、觀念的價値哲學のうちに存するのであつて、それは、價値意識の成立を說明することができない。

價値哲學が、價値意識の先驗性と生得性を主張し、これを經驗的意識と峻別しているのは、一つの臆說であり、獨斷であるといわねばならない。何となれば「先驗的」または「生得的」とは「說明ができない」ということに外ならないからである。

人間的存在は、物質を基礎として、有機的・生理的生命の上に、更に心理的・價値的高さにまで達している。人間的存在を表象する價値的意識といえども、決して人間の生命の表現としての感覺にもとずかずに在るのではない。それは、人間的生命が、感覺的存在から心理的存在へ、そして心理的存在から價値的意識へと發展したまでであつて、決して、特別の要素から生成したものではない。

價値は人間の自覺的意識のうちに成立した思惟の論理性でしかない。そういう論理性は、人間の住んでいる世界の中から、自覺的に與えられたものであつて、感覺の一つの表現でしかない。

しかし、そのことと矛盾せずに、人間の自覺的主体的意識のうちに、價値的批判的論理が存在していることを見のがしてはならない。これを見のがしたところに、上述の誤謬的立場があつた。

二

もとよりかような意識は「批判意識」であり、また「實踐意識」である。しかしそれは價値意識であるが故に、常に必ずしも「社會的」であるとはいえず、「個人的」でもあり得る。いな本來、價値意識は「個人的」である。しかし、「社會的」には、個人意識が、集群的關連においてとらえられねばならないところから、「個人的」な價値意識が、他の多くの「個人的」價値意識との關連においてながめられるのであり、したがつてそこには價値も亦、自由たり得ないで、却つて制約的な存在としてながめられねばならない。

價値は、ほんらい、主体的意識であつて、客体的に在るものではない。價値哲學者は、したがつて、これを先驗的であるとし、また自由であるとする。この立場から、もとより意思自由論が主張され、社會における「嚴密科學」の否定論が生まれる。嚴密科學とは「經驗的法則科學」という意味に解されるであろうが、かような嚴密科學が、社會の科學について不可能であると主張されることは、すでに、「社會的」なる領域と、「個人的」なる領域との混同されていることを物語つている。

何となれば、社會の科學も亦、價値を主体的意識として、問題としないわけではないけれども、その主体的意識としての價値を、他のそれとの社會的關連性において問題にしなければ、社會の科學的觀點は成立しないからである。社會においては、個人の主体的意識のなかに成立した價値評價が、決して、孤獨的に、問題にせられてはならない。必ずそれは、集群狀態において問題にせられねばならない。

そこで、社會においては、この價値批判そのものが、互に他人の價値批判的立場との關係において、互に制約せられることなしには、存在しない。もとより、それは「存在しない」のであつて、存在を前提としない限り、自由な主体的價値意識として、在り得ることも亦、許されることはいうまでもないが、しかし「存在性のない」いわば自己滿足にすぎない價値意識は、結局、社會的に現實性がないのであるから、これをわれわれは、ユートピヤと云うのであつて、それは幻想的意識または空想的意識にとどまるであろう。

しかし、もとよりここで「存在性がない」價値意識というのは、決して、いわゆる「實踐的價値意識でない」という意味とは異つている。たとい「實踐的價値意識」でない「純粹的價値意識」であつても、それが自己滿足的なものにすぎず、他の個人の主体的意識の内容としての「純粹意識」との一般性において考えられ得ない、孤立的意識であるならば、それは價値の一般性と矛盾するのであつて、ユートピヤにすぎないものとなるのである。

價値意識には、ほんらい「純粹的」なものと「實踐的」なものとが區別せられる。「純粹的價値意識」とは、認識の基礎をなす價値批判のように、その價値批判が、決して、直接に、その意識主体自身の個人的行爲の在り方を定める根據となるのではない。これに反して、「實踐的價値意識」は、意識主体が、その行爲の在り方を決定するための批判的根據としての價値意識である。人々は、常に「純粹的」價値意識によつて、學問研究をなし、論理を構成し、價値一般を定立する。その價値の標準となるものが「範疇意識」である。人々は、また「實踐的」價値意識によつて行爲し、かつ行爲そのものを批判する。その批判のために、價値の標準をなすものが、「規範意識」である。

しかし實踐的價値意識も、それが規範意識である場合は、實踐的價値意識一般にすぎないのであつて、具体的實踐

についての價値意識を意味するのではない。例えば藝術・宗教・倫理・法などを、それぞれ規範價値そのものとして考究する場合には、價値意識一般が問題とせられるだけであつて、具体的な實踐意識は、直接の問題とはならない。

しかし、更にここに次のような別の問題がある。それは「純粋意識」と「經驗意識」とを對立的に認める立場についてである。意識そのものの成立過程について、「純粋的」なものと「經驗的」なものとが在るということは、認識の成立において、認識主体それ自体と、それに對立する認識の客体としての「物そのもの」との關係によつて、認められるのであるが、それは認識價値そのものの生成過程について云われることであつて、もとより認識論上の先驗論や經驗論とは別のことがらであり、認識そのものの構成過程の分類にすぎない。

ここに述べている「純粋的價値意識」と「實踐的價値意識」ということは、それとは別のことである。法學のような、規範の研究を目的とする學と異り、政治現象のような、社會的實踐そのものの研究を目的とする學は、直接的には、いわゆる「純粋的價値意識」よりも、むしろ「實踐的價値意識」に關係し、かつ、具体的實踐的價値意識に關するのであつて、決して、一般的實踐的價値意識に關するのではない。法學のような規範の學が、むしろ、この一般的實踐的價値意識に關係するであろう。

そこで、實踐的價値意識のみが、「一般的」であれ、「具体的」であれ、ここに必要であつて、純粋價値意識は、今の場合、社會科學的考究の領域外に置かれなければならない。

もとより、念のため附言すれば、純粋價値意識にも、「範疇」のような一般的なものと、「概念」のような具体的なものとの兩種があり、次のような表式が成り立つであろう。

意識
- 價値
  - 純粹價値
    - 一般的——範疇
    - 具体的——概念
  - 實踐價値
    - 一般的——規範
    - 具体的——行爲
- 感覺——心理——生命——物質（風土）

われわれは、いまここに、意識の分類を問題にしているのではないが、社會現象が、常に、意識に關係せずしては成立しないところから、論をすすめる過程的必要として、ここに、かような意識の在り方を分類して置いたのである。

社會現象は、上に述べたように、多數個々人の作る集群現象であり、かような集群現象は、各人の社會行爲の相互關係であり、または多數個人によつて作られる社會構造であつて、當然に、それは實踐的價値意識の集群關係でなくてはならない。

しかしその場合に、おのずから二つの研究領域を區別することが必要である。その一は、その實踐的價値意識の一般價値を問題にする場合であり、その二は、實踐的價値意識の具体的可能性を問題とする場合である。例えば、法學は第一に屬し、政治學は第二に屬する。規範意識のうちにおいても、例えば、藝術のごときは、價値意識そのものが感覺的要素をおびるところがあり、したがつて個人的であり、宗教においては、その價値意識が、絶對的であり、且

つ具体的であつて個人的であり、また倫理規範については、客体的社會性を無視し得ないにしても、なお意識主体の立場が重んぜられるために、意識主体の個人的立場が重要な意味をもたざるを得ない。

これに反して、法規範意識は主体的意識よりも、むしろ客体的社會關係が、より重要な意味をもち、したがつて、他の規範意識よりも、價値成立の社會性が強い。ここから法學の、社會科學的研究方法の可能が成立することとなるが、いわんや政治學のように、規範意識のような一般價値を問題としないで、むしろ實踐意識の具体的可能性を問題とする學に至つては、いよいよ社會科學的研究が要求せられることとなるのである。

社會現象として、多數個人の集群現象が問題にされる場合には、實踐的價値意識でないところの、純粋價値意識は直接の研究對象とせらるべきではない。しかし、實踐的價値意識のうちでも、その一般價値を問題とする場合においては、それを主体的個人的意識において問題とすることは、集群現象たる社會現象として、これを見る立場と矛盾することになる。

故に、藝術や宗教や倫理規範のような、主体性の意識として成立する價値は、社會の科學的研究よりも、むしろ、哲學的研究の領域に屬せしめられている。

しかし、それが實踐意識である限り、たとい價値一般が問題にされているとしても、その社會的客体的研究が許されないわけではない。ただそれは、おのずから哲學とは、異る立場から研究されるだけである。藝術や宗教や倫理の哲學でなしに、その社會科學が、一つの特殊な立場をもつて成立することになるわけである。

いわんや、社會性の濃厚な、むしろ社會性において成立する法規範や、具体的な實踐的價値意識としての政治現象

などの研究は、却つて、社會科學として成りたたねばならないのであつて、決して哲學であつてはならない。

三

價値意識の基礎には、感覺的意識がある。前者は後者の上に成りたち、前者は後者によつて規定せられる。しかし、社會の科學は、意識のかような規定關係を研究の對稱とするのではない。社會の科學においては、むしろ價値意識の集群關係によつて成立する、價値意識の規定關係を問題にしている。價値意識の主体は、個々人であるから、それは同時に、個々人の集群關係のなかで、各個人の主体的價値意識が、いかに規定されるかを見ることである。

この關係が、意識と社會的存在との關係そのものを意味するのである。社會の科學的研究の課題としての、社會的存在は、決して、物質や感覺や心理關係を意味するのではないのであつて、價値意識の集群狀態そのものを意味しているのである。

多數の人々が集つて構成する社會現象は、往々考えられているように、決して何らかの物質的狀態ではあり得ないのであつて、個々の主体的意識の集群的に存在する、一つの交錯的狀態そのものでしかない。もとより、この狀態のより基本的な基礎として、物質や生命や感覺や心理的なものの交錯狀態が在ることは云うまでもないが、それは自然科學的研究領域としての、生物としての人間と地學的風土との規定的關係に外ならないのであつて、社會科學的視野の外にあるべきものである。

社會の科學は、上に述べるように、價値意識においての多數個人關係としての、いわゆる「社會的」領域である。一つの價値意識が、かように「社會的」に成立するものである限り、それは常に、社會の科學的研究對稱でなくてはならない。同時に、それはまた科學的研究であるから、現象のうちにひそむ恒常性を見出し、それを實踐の合理的可能性を決定する資料として、實踐者に提供する役割を果さねばならない。

そこで、この現象の恒常性が、いわゆるこの「社會的」なるものの中に、はたして在り得るかどうか、また在るとすれば、はたしてそれが何處に、どのような形式であるかという問題になる。

價値意識は、主体的意識のうえでは、自由なように見える。もとより、それは主体的なために、自由なように思われるだけであつて、決して自由なものではないが、たといそれが自由であると假定しても、「社會的」には、價値意識が集群關係を有し、孤立的ではないのであるから、互に異る主体的意識の對立關係の制約をうけずには、存在し得ない狀態の下に置かれている。すべての主体的價値意識は、他の多くの主体的意識と結びつき、交錯し合うた結果として、初めて「社會的」なものとなるのである。したがつて、少くも「社會的」には、價値意識も亦、決定せられたものとして存在しなければならない。

社會の科學的研究の課題は、かような價値意識の集群的——換言すれば社會的存在のなかにおいて、一つの主体的價値意識の、決定され方を明らかにすることにある。

例えば、社會には、法規範のような、實踐的價値意識一般が存在している。その價値一般の基礎の上で、各人はそれぞれの主体的價値意識を持つのであるが、この主体的價値意識は、當然、客体的價値一般によつて規定せられる。

それが法意識である。各人が、この場合、主体的には自由に意識し得ると考えるかも知れないが、實際はそうではない。自由に考えられた主体的價値意識は、現實に社會的法規範と一致しないから、それは法規範として社會的現實性をもち得ないユートピヤ的法意識でしかない。ユートピヤは、自由に考えて見たところで、全然存在的には價値を持たない。

法規範のような、實踐的價値意識一般は、或る内容を持つ（法たる規範價値の根據は、後に述べるように、團体合目的性である）多數の主体的價値意識の、集群社會的結合で成立するものであるが、それが成立して客体的價値意識一般として、すなわち規範として、社會的に存在することとなれば、それは更に、逆に主体的價値意識を規定することとなるであろう。

更に、實踐的價値意識の具体的實踐に至つては、もとより、實踐的價値意識一般によつて規定されるのみならず、多數の實踐的價値意識の具体的實踐によつて規定せられるであろう。前者は實踐意識の合法性の規定となり、後者はその社會的可能性の規定となるのである。

そこで社會の科學的研究の目的は、かような社會的一般的規定を明らかにすることによつて、妥當にして可能な實踐意識の内容と在り方とを明らかにするために、價値意識の集群的社會關係の恒常性の理論を確立することに外ならない。そのことは、主体的價値意識と客体的社會的存在としての集群的價値意識との反映的關連を明らかにすることであつて、その間の恒常性を見出すということである。それはイデオロギー論に外ならないであろう。しかし、これまでのイデオロギー論においては、主体的意識に反映する社會的存在の、各々の要素の分析が十分でなかつたように

思われる。「主体的意識」とは何であるか、また「社會的存在」とは何であるかということが、十分にきわめられていなかつたように思う。したがつて、イデオロギー論そのものが正確さを缺いでいたであろう。

イデオロギーを構成する基礎となつている「社會的存在」とは、決して風土（地學的）そのものを意味しないことは明らかであるが、しばしば考えられているような、いわゆる「生産關係」の「社會構造」であるとしても、それは決して「物質的」關係でなしに、むしろ「意識的」關係に外ならない。しかも、その意識は、「心理的」感覺的意識ではなしに、むしろ「價値的」實踐的意識に外ならない。かような「價値的」實踐意識が、集群的に構成されているところに、社會的生産關係があり、社會構造があるのである。

またしばしばそれは「生産關係」であるが故に、「技術」によつて規定されると考えられているが、技術が意識を決定するのでなしに、意識が技術を決定するのであり、技術を決定する意識は、感覺のうえに成立したものに外ならない。

例えば、寒冷は衣食住の上に溫暖を要求し、暑熱は冷涼を要求するであろう。溫を欲し、涼を求める意識が、一方では毛皮の技術を、他方では製氷の技術を生ずるのであつて、そのうえに、生産關係が發展してくることになる。經濟關係は、物質や感覺の關係でなしに、價値意識の關係であることは、極めて明瞭である。

人間は性生活と衣食住の要求を最も基本的な意識として所有し、したがつて、その關係において、最も「原始的」かつ「基本的」な社會關係を持つに至つた。人間の性生活が、すでに感覺的意識にとどまらないで、戀愛を要求すれば、價値意識を伴わざるを得ず、衣食住の要求が、生理的な滿足にとどまらず、同じく價値意識を伴わずにはあり得

ないために、美が求められ、規範が生じ、藝術が存在することとなつた。「社會」はかような意識の集群關係のうえに成立しているのである。物質は、もとより、より基本的なものではあるが、それは「自然的存在」であつて、決して「社會的存在」ではないのである。

故に、イデオロギーとは、意識の感覺性ではないのであつて、價値意識へ反映した社會的存在であり、價値意識の社會的集群關係の規定であつて、價値意識の社會的集群關係が、社會的集群を作つている各個人の價値意識に反映して、これを規定することを意味している。すなわち、かような關係で規定された價値意識が、イデオロギーである。

もとより、前からしばしば述べているように、價値意識は、かような社會的存在を反映することなしに在ることもできる。それが價値意識の特徴であつて、感覺的意識と物質的（自然的）存在との必然的關連と、異つている點である。

物質的存在は、必然的に感覺的意識を規定する。その規定の仕方は法則的であり、因果法則的である。しかし、價値意識に對する社會的存在の規定は、少しくそれとは異つた關係で行われる。それは價値意識が、社會的存在によつて規定せられる場合に、必ずしも同一の規定の仕方をしない。何となれば、各人は價値意識の主体性の中で、イデオロギーを構成するのであつて、社會的存在が、直ちに各人の主体的價値意識に轉換するのではないからである。そこに客体的狀態が、主体的立場に轉換される過程に、價値意識の批判的意識が働くからである。

人々は、そこで價値意識を、批判的であり、したがつて「自由」であると考えるのであるが、それは餘りにも急に結論へ飛躍しすぎたのである。

何となれば、もとより價値意識である限り、批判的であるのは當然であるけれども、批判の結果、得られる正しい結論は、いくらでも在るわけではなく、それは唯一つしかないからである。しかも、そこで考えられる「正しさ」は決して「純粋な」論理にもとずくものではなしに、社會的存在の「具体的な」在り方にもとずいて決定されるのであつて、この社會的存在に妥當しない論理によつて作り出された價値意識は、單なるユートピヤであつて、存在意義を持たないからである。

要するに、社會的存在が、各人の價値意識の中で、主体的にとりあげられる場合、そのとりあげかたには、いろいろ在り得ることはいうまでもない。故に、人々はそれを「自由」だと考えた。しかしその價値意識のいろいろの構成の仕方の中で、存在的に妥當なものは、決して多くあるわけはない。必ず唯一つに違いない。したがつて、この唯一の妥當な價値意識の主体的な立場だけが正しいのであつて、それと矛盾する立場は、すべて正しくない。すなわちユートピヤであつて、存在に妥當しない。

かような意味で、意識の價値的主体性の立場は、批判的であるが故に、自由であると主張されてきたけれども、それは形式的論理的な考え方にすぎないのであつて、實質的具体的——存在的に考える仕方を誤つて抽象化しているものといわねばならない。

故に、われわれ人間各個人の主体的價値意識は、社會的存在關係によつて、正しく規定された場合においてのみ正しい。これが正しい場合に、この主体的立場から出てくる社會的實踐が正しい効果をあげる。すなわち主体的に意識された通りに、間違いなく社會的に存在化される。そこで實踐の意識と事實との一致が得られる。行爲の動機が、間

違いなく効果的に事實化される。

社會の科學は、實に、かように社會的存在關係を客体的に研究することによつて、實踐的に間違いのない主体的意識を確立するに必要な原理を明らかにするのが目的である。それは當然、ユートピヤ的意識の成立に警告を發し、主体的價値意識の社會的存在性を樹立しようとする。この意味で、社會の科學は、イデオロギーの研究だと云えるのである。

故に、社會の科學的研究において、重要な問題は、「社會的存在」の客体的な分析である。これを正確に行わないならば、それは失敗である。とくに「社會的存在」の、何であるかが正しく理解されていないような場合には、社會の科學的研究は、全く難破しなければならない。故に、前から述べているように「社會的存在」とは、多數の價値意識の集群關係であるのみならず、更に、その多數の價値意識の内容が、「純粹的」なものでなしに、「實踐的」でなくてはならないということ、そしてなお、それが「實踐的價値意識一般」であつてもよいが、とくに「具体的實踐的價値意識」でなくては、社會の科學的研究の對稱領域に含まれる、いわゆる「社會現象」とは云いがたいということである。

實踐的價値意識一般を、社會現象として、社會の科學的研究の對稱領域と見なす場合においては、藝術・宗教・倫理・法などの「規範科學」が認められることとなるが、政治學や經濟學は、規範科學ではないのであるから、具体的實踐のための價値意識の正しい確立が問題とされるのであつて、そこに、これらの社會科學の研究目的が置かれねばならない。

四

自然科學においては、自然現象の中に見出される因果法則を明らかにすることが、研究目的とせられている。その意味で自然科學は、「法則科學」である。

因果法則とは、原因Aがあれば、必ず結果Bがあるという、同一原因と同一結果との恒常反復性であろうが、社會現象における必然性や恒常性は、果して、因果法則をなさないであろうか。

價値哲學の見解によれば、價値は一回性であつて、反復性を持つものでないとせられる。もとより、それは範疇や概念に見られる純粋的價値意識の一般性を否定することではなく、單に實踐的價値意識の反復性を否定するものであろうが、實踐的價値意識についても、一般的な規範的意識が、現存しているのみならず、實踐的價値意識の具体性も社會的存在によつて、一般的に規定されるのであつて、恒常性が、そこに認められなければならない。この恒常性は、價値哲學者の考えるような、純粋な、形式的な、論理的な原理の恒常性ではないのであつて、極めて具体的な、社會的な、現存在において決定される一般性であり、恒常性である。

そして、かような實踐的價値意識の一般性や具体性を決定する社會的存在のどこに、法則的な恒常性が認められるのであるかといえば、それは意識の社會的集群性の中にひそんでいなくてはならないであろう。しかしそれはどのような恒常性であろうか。

自然科學における因果法則は、物理學的法則の場合には、絶えず「反復」(repeating)する形式で見出される。化

學的法則も亦同樣であろう。しかし、生命の現象は、絶えず「進化」(evolution)または「變異」(mutation)の形で、法則性を含んでいる。したがつて、同じ法則性であつても、その存在形式は、全く同じというわけではない。そのように、社會現象においては、恒常性が、むしろ「發展的」(development, chaging)形式で見出されるように思う。例えばインフレの中では、インフレの法則性を利用してインフレを克服する。資本主義社會では、資本主義の法則を利用することなしには、有効な行動はとれない。

そこにはインフレや資本主義についての、恒常性が前提されているのであつて、その恒常性を、すでに法則性と考えているのであるが、かような恒常性が、法則性であるかどうか、また自然科學上の因果法則と同じ性質のものであるか、或は異る性質のものであるかが問題である。

なるほど資本主義は、歷史上の特殊的時代にのみ存在するのであつて、且つそれみずから發展的である。しかし資本主義は、資本主それ自体の法則をもつて發展しており、この法則性の本質は、決して恣意的に變更し得るものではない。資本主義が存する限り、そこには絶えず、恐慌の危機が含まれており、これを起らないようにするためには、恐慌の法則に即して、政策をとる必要がある。

更にもつと一般的な問題を考えて見ると、國家や民族や階級が存在し、どこでも、またいつでも、それは國家としての、民族としての、また階級としての法則によつて支配されずには存在しないだろう。

これは、もとより「恒常性」であるが、この恒常性を「法則性」と呼ぶことが、何故いけないであろうか。何となれば、これらの社會現象としての存在性は、絶えず人々の主体的意識に反映し、主体的意識を規定し、更に、主体的

意識の在り方を決定する原因となつているからである。

もとよりその場合、主体的意識は、無政府主義としても、また反對に、國家主義としても在り得るし、ブルジョア意識やプロレタリヤ意識の階級的分裂も、もとより當然に在り得ることであるが、同じ社會的存在の基礎から、何故かようにいろいろの異つた意識が成立してくるかといえば、それは決して、純粋な論理的價値自由の結論としてではなしに、先ず第一に、意識者の、それぞれの社會的存在關係が、互に異つているからであるし、更に、第二には、意識者の、みずからの置かれている社會的存在性を、或者は臆説的に理解しており、また或者は科學的にとらえている場合もあつて、必ずしも一つのイデオロギーとして、反映されていないからである。

かような二重の原因で、イデオロギーの分裂や對立が生ずる。しかし、かようなイデオロギーの分裂や對立は、主体的價値意識の特徴であつて、決して、そのすべての立場が正しいわけではない。一つの同一な條件によつて構成された、社會的存在によつて反映される正しい主体的價値的意識は、一つしかない。他のものはすべて誤謬である。誤謬と云い、また反對に、正しいと云うのは、科學的でないか、あるかという意味であつて、科學的に正しいイデオロギーのみが、實踐的價値意識に對して、具体的實踐の可能性を與えるのである。

社會的存在を誤認したり、社會的存在關係の分析が不正確であつたりした場合には、決して社會的存在と主体的價値意識との反映關係は、正しく成立しない。したがつてまた逆に、かような誤謬や不正確な分析を基礎として成立した主体的價値意識は、具体的實踐的價値意識として、實踐上の正確さを持つことができないことになる。簡單に云えば、誤つた不正確なイデオロギーは、ユートピヤであるから、實踐的に失敗する。つまり上述するように、かような

ものは、實踐上の可能性を持たないということである。すなわちそれはユートピヤにすぎないから、科學性がないのである。

ここに社會の科會的研究の任務が存しているのである。すなわち社會の科學的研究の必要は、いろいろの主体的價値意識を成立せしめている、いろいろの社會的存在關係（實踐的價値意識の集群關係）の分析によつて、主体的價値意識のイデオロギー性を知り、それによつて實踐的に妥當する（すなわち可能な）主体的價値意識を科學的に確立するということである。（實踐意識の妥當性は、同時に、可能性でなくてはならない。）

したがつて、社會の科學的研究においては、一つの主体的價値意識と、社會的存在としての、多數の客体的な價値意識との關連を明らかにし、こういう關連のなかにひそむ、いろいろの、意識に對する社會的決定の要因を求め、一定の素因の下で、どのような結果が生み出されるかということを、具体的よりも、むしろ一般的な法則性においてとらえようとせられているのである。この恒當的法則性さえ明らかにせられていさえすれば、主体的價値意識の中で、具体的實踐に妥當する、正しい、可能な意識が、いかにあるべきかが、決定せられ得る筈である。現に社會科學は、そのような仕事を担當しているのであつて、決して、それと別のことを、ここで述べているのではない。

そうだとすると、この意識に對する存在の決定性は、やはり、一つの因果法則だと云つて差支ないと思う。存在的に可能な意識は、決して二つ以上ある筈はないのであつて、必ず唯一でなくてはならず、それは法則的に決定されているのであり、その法則を求めることが社會科學なのである。

ただ、社會における因果法則は、「反復的」または「進化的」でなしに、「發展的」な反復であり、「發展的」な

恒常性であり、「發展的」因果關係である。

例えば國家は恒常的であるが、發展してもいる。階級は絶えず闘爭しているが、その闘爭は、絶えず新しい階級關係を成立せしめている。しかも、これらの發展が、決して、國家そのもの、または階級そのものの、社會存在關係の恒常性と矛盾して發展しているのではなく、その停滯も、またその飛躍も、常にそれらの在るべき法則性の下で、正確に發展しているにすぎない。したがつて、われわれは、その因果法則を研究することによつて、實踐意識の科學性を確立せんがために、社會科學の研究に從うのである。

社會現象の中に見出される或る恒常性が、因果法則であるということについて、も少し考えて見よう。先ず政治や經濟の問題を例にとつて見ると、個人の意識が、決して直ちに實現されるわけではない。たまたま多數の集群的意識の中で、或る種の妥當性をもつた意識が實現されてゆくにすぎない。もとより何人も意識を實踐に移すことはできる。しかしその場合に意識されたことが、實踐の上で間違いなく實現されるとは限らない。どうした場合に、意識が間違いなく實踐によつて實現されるかといえば、それは、他の關係する人々の意識との關連を考えた上で、それが可能である方法を選擇したときである。ここに意識を可能にする限界が横たわつているのであつて、ここに法則があると云えるのである。

人々はいろいろのことを考える。人々の意識の仕方は千差萬別であろう。しかしいやしくも社會的實踐について意識する限り、社會的存在に拘束されないわけにはゆかない。そこには決して、千差萬別の意識が許されるのではなしに、社會的に可能な意識は、恐らく唯一つであろう。政黨が選擧に勝利を占める方法は、いろいろ考えられるとし

ても、現實的に、具体的な場合を前提すれば、唯一つしかないのであつて、他のすべての考え方は具体性を持たず、成功性もないということになろう。一つの商品の市場價格が確定するについても、具体的條件の下では、一つの價格のみが許されるのであり、また國際戰爭の勃發や勝敗の見透しを立てることができるのも、具体的諸條件から、唯一の結論が歸納せられ得るからであつて、たとい、しばしば見透しや、見解の對立があるとしても、それは自由な意識のためではなしに、條件となる要素を見のがしたり、誤解したりするからにすぎないからである。かくして唯一の結論しかないとすれば、一つの意識と、一つの實踐のみが、有効性をもつのであつて、それと異る意識や實踐は、ユートピヤにすぎなかつたということになるのである。かような唯一の有効な實踐を規定しているものが、何故、因果法則ではないと云えよう。もし、それは意識的であるから、因果法則ではないと考えられるとすれば、それは意識が自由であるという誤つた前提に立つているのであつて、意識は、社會的存在の中で制約されており、決して一歩も、そのラチ外に出ることができないことを忘れているにすぎない。

因果法則とは、原因と結果との恒常性の法則であろうが、國家・階級・戰爭・恐慌等々社會現象として恒常する現象の中には、また恒常的な法則性がある。もとより、それらの現象は絶えず變化してやまない。しかしそれは前述するように、社會的存在は「發展的」であるだけのことであり、それは法則的に變化しているのであつて、因果法則の存在を否定する理由とはならない。

資本主義は、近代社會にのみある現象であるが、近代社會には、資本主義が恒常しているし、そのことについては因果法則が支配している。封建制が何故崩壞し、近代社會のあとに、社會主義社會がいかにして出現するか。この事

實と經過を說明し得る理由は、社會存在も亦、因果法則によつて支配されているからである。

そこで、社會的因果法則と自然的因果法則とは、同じか、または異るか。

自然科學上の因果法則は、前に述べたように「反復」する。しかし生命の現象については「反復」ばかりでなく、「進化」または「變異」ということが認められている。そして進化及び變異は、因果法則と決して矛盾することとは認められていない。しからば社會の因果法則が、「發展的」な關係で見出されることも、簡單に、因果法則ではないとは云えまい。因があれは果があるというだけでなしに、同一原因の下では、必ず同一結果しか豫想されないということは、社會現象についても、そのままあてはまることであろう。だから社會現象も亦、發展もするが、同時に、反復もしている。

更に考えねばならないことは、自然的因果法則と、社會的因果法則とは、二元的か一元的かということである。フイジオクラットいらい自然法則と社會法則との二元性が主張されてきているが、この法則二元論は、社會法則の非嚴密性——すなわち意思自由の介入を認める折衷主義にもとずいているのであつて、その見解の根本そのものが誤つている。

宇宙の運行は、人類の歷史過程をも含んで、唯一の法則に貫かれなければならない。法則が唯一であるところに宇宙諸現象の調和と統一的運行があり得る。人間も亦生物である限り、この運行の外にあつて、これと對立し得るものでないことはいうまでもない。

かような唯一の法則の中で、人間は價値意識を持つているのである。故に、社會の法則が、價値意識に關している

という理由で、宇宙の唯一の法則のラチ外に置くことは許されない。因果法則は、當然に、唯一であつて、自然因果法則も、社會因果法則も、唯一の源から出てきている。ただ一方は價値意識という要素を含まず、他方はこれを含んでいるが故に、因果法則の表現形態が、兩者とも同じであるというわけに行かないだけのことであろう。

故に、われわれは、自然科學においても、社會科學においても、法則の一元性を主張しなければならない。そしてその上で、自然的因果法則と社會的因果法則の表現形態の相違を認めたいと思う。兩者の相違は、前者が無意識的法則であり、反復的變異的法則であるのに對して、後者は意識的法則であり、發展的法則であるというにある。

しかし、この「發展的」という意味は、必ずしも「歷史的」と同一意味をもたない。歷史的なるものは、常に、現在から過去への回顧においてのみあること、並びに、唯一の、すなわち一筋の發展過程を、既往の既成事實として見ることであるが、ここに發展的というのは、現在から將來への發展的な過程を構成してゆく、意識的實踐のための、因果法則性が重要な問題となるのであり、それは單に、一筋の一貫的發展でなしに、多くの社會構造單位の多樣な並行的發展の、何れの場合にも妥當する、一般的因果法則性を意味しているのであつて、決して「歷史的」ではないのである、それはあくまで「社會法則」であり、既成の結果に對する原因を求めるよりも、むしろ現存の原因の中から來るべき結果を豫見することに、目標が置かれているのである。

五

價値意識のイデオロギー性が主張せられる場合に、起る一つの疑問は、科學上の「眞知」及び「眞理」(Wahrheit)

Wahrheit)の意味である。もとより科學上には、絶對的意味においての「眞理」も「眞知」もあり得ない。それは認識者たる人間の認識能力が、先驗的でなしに、經驗的だからである。したがつて科學的「眞知」及び「眞理」の本質は、經驗的な「一般性」であり、經驗上における一般的な妥當性に外ならない。

一つの新しい科學理論や事實が發表され、科學者がその妥當性を認め、學界において眞知または眞理とされることは、論理的にまたは事實的に、それが一般的經驗と一致しているということに外ならない。新しい經驗が生ずれば、前の眞理や眞知は、崩れることになる。故に科學上の眞知や眞理の本質は、「永久的に」絶對的なものではなしに、「一般的に」絶對的なのであつて、むしろ相對的なものにすぎない。

それにもかかわらず、科學には、眞知と眞理がなくてはならない。それは、いかにして在り得るのであろうか。純粹的價値意識一般において、認識が可能にせられる場合、この純粹的價値意識一般も亦、社會的現存在を反映せずには成立しないであろう。そこで、イデオロギー論では、次のようなことが主張せられてきた。

すなわちブハーリンは、階級社會における階級科學の分裂を主張したのであつて、ブルジョア科學とプロレタリヤ科學との對立を認めた。ただ彼は、資本主義から社會主義への發展の過程において、プロレタリヤ階級の社會綜合的任務を認めるが故に、その意味で、プロレタリヤ科學の眞理性を說いた。(『史的唯物論』)

これに對して、カアル＝マンハイムは、中產層の階級浮動性をもつて、同時に、階級綜合性と見ることにより、中產層による科學的眞理の可能性を認めた。(『イデオロギーとウトピー』)しかし、これらの二つの理論は正しくないであろう。何となれば、ブハーリンにおいては、階級鬪爭の過程においては、少くも科學理論が二つ在り得ること

を認めねばならないし、またマンハイムにおいては、階級浮動性と階級綜合的立場とが、直ちに同一視せられていて、政治的陣營理論と科學理論とがいまだ正確に識別せられていないところに、論理の飛躍がひそんでいると云わねばならないであろう。

われわれは、科學的眞理や眞知の唯一性を無視することはできないのであつて、同一事項について少くも同時に、二つ以上の科學的眞理が成り立ち得るということは、認め難い。

事實上われわれの社會的存在には、綜合的な立場と、分裂的な立場とが同時にあり得る。例へば、世界と民族、民族と階級である。民族は、世界的立場に對しては分裂的であるが、社會階級に對しては綜合的立場となる。また民族のない世界や、社會階級のない民族は、現實には存在しない。そこで、われわれの價値意識は、この二樣の存在を反映する。それが、世界意識であり、民族意識であり、そして社會階級意識である。その場合に科學的眞理や眞知は、價値意識一般において成立するものであるから、綜合一般的存在を反映せずには成立しないのであつて、階級分裂的意識にとつては、民族意識が綜合的立場となり、民族對立意識に對しては、世界意識が綜合性を持つことになるだろう。

われわれ人類が、小さい民族生活の中に閉じ籠つていた間は、世界的綜合的意識をもち得なかつた。封建時代には民族統一社會生活の地方的分裂が甚しかつたために、民族的綜合意識が稀薄であつた。かような生活經驗の狹さは、意識の偏狹さとなつて反映し、科學的眞理をも歪曲したであろう。

カントの國際連盟論と、ヘーゲルの主戰論との對立は、ドイツ自由主義と民族主義とをそれぞれ反映しているが、

それはドイツの政治的歴史的段階の相違を物語つているであろう。産業革命を終つた一八三〇年代以後のヨーロッパにおける階級科學理論の成立も亦、時代の社會性を反映しているであろう。しかし、社會存在性を正しく反映した理論そのものが、直ちに眞理であるのではないのであつて、その綜合性の意識において、初めて科學的眞理が得られるのであり、その綜合的意識は、上述するような綜合的社會的存在の反映としてのみ成り立つにすぎない。

近時、國際經濟の發達は、國際文化を促進しつつあるが、民族的對立が存在する限り、同時に、それは分裂意識をも包含している。近代民族統一國家が成立し、民族統一意識はとみに强化されてはきたが、近代社會の階級的矛盾が深刻化するにつれて、階級的分裂意識が、また强化される。

かような統一綜合意識と分裂矛盾意識とは、現に並存しているのであるが、それは現實の社會的存在そのものが、階級を民族の中で成り立たせ、民族を世界の中で成り立たせているからである。

がんらい民族とは、生產關係の一應の社會的綜合体として存在している。社會階級は、この綜合体の中に存在する分裂と矛盾において成立しているのであるから、現實に社會的現存在は、民族と社會階級の綜合對立において成立しつつ、それが更に、國際的な、綜合的生產關係の中で、矛盾對立をもつて存在している。それが、世界の現存在の具体性である。

社會科學的眞理や眞知は、これらの綜合的社會經驗を反映する綜合的意識において成立する。ここに科學と科學者の社會的立場も亦ある。故に科學は綜合的であり、科學者は階級浮動的である。

しかし、科學と科學者も亦、階級社會性の中に存在するのであつて、現實には、社會階級的立場から絶對的に解放

されることはできない。故に、科學者も亦何らかの階級的立場をとるであろう。その前提の下に、科學者が、いかにして綜合的な科學的立場を守ることができるかということである。（民族的立場についても亦同樣である。）

その回答は簡單であつて、沒落する階級が矛盾を擔つて、次第に偏狹な部分的立場に陷らざるを得ないということ、これに反して、發展する階級が、現在の社會的矛盾の解消者として、綜合的全体的立場をもつようになるということである。そして、その中間の理論は、事實上しだいに清算されて行つて、社會階級の矛盾の激化は、科學理論を中心として、いよいよ明白な非科學理論と、明白な科學理論との對立を反映するようになり、非科學理論は、當然科學的に支持され得なくなるために、矛盾を擔いつつなお支配性を維持する沒落階級の暴力をもつて支持されることになるだろう。それが、帝國主義段階における思想の抑壓と、眞正なる科學に對する權力的武力的彈壓であり、すでにギリシヤ・ローマ以來、秦始皇帝以來、周期的に記錄されている文化史上の暗黑時代である。

六

社會現象の、特殊的現象としての政治現象は、常に「民族」と「社會階級」の綜合關係として成立している。民族と社會階級とは、各々單獨に存在し得るものでなしに、常に、その兩者の綜合において存在している。民族とは、前述のように、一應の、社會的生產關係の、必要な綜合統一的社會意識として存在しており、現在では、多數の民族が集つて、更に世界を構成している。

社會階級は、統一的生產關係の綜合社會構造としての一つの民族社會の中における、生產關係の各部分の担當者の

間に生ずる、社會的地位の不平等關係を基礎として發生してきた社會的支配關係として構成されている集團的對立意識である。民族社會と階級社會とは、常に、同一的存在の別の面であつて、民族と社會階級とは互に相伴わずには存在しない。社會階級のない民族社會も、民族でない社會階級も、現實的には存在しない。のみならず、民族と社會階級は、ともに、その發生も、その終末も、同時でなくてはならない。

かような階級的民族社會の上に成立しているものが、國家である。國家は、その場合、より以上の法的規範力の支配構造を持つことのない、最高の法規範力の支配的統一構造（すなわち主權團体）として見出される。その規範秩序が國法であり、その規範力が、權力である。

國法の統一秩序は、民族の統一關係を反映する生產關係の綜合的要求の意識であり、國家權力は、社會階級の對立と支配關係を反映する法的支配の意識である。

この國法と權力の綜合としての國家は、統一的人格性の最高絕對性と、集團生活の統一的目的そのものを規範價値とする合法性と、そして現實の生產關係の中から生じてきた社會階級的支配關係を、實力的規範力とする。三つの分析的屬性の綜合的社會意識である。

したがつて、國家の法と權力とは、民族の統一意識と社會階級の對立意識との、社會集團的綜合的効果として實在し、これを實在せしめる社會過程としての、實踐意識そのものにおいて、政治運動が見出されるのである。

故に政治運動は、一方では民族、他方では社會階級を反映せずにはあり得ないが、同時に、絕えず民族と社會階級に刺戟されつつ、その社會存在關係を反映することによつて、動いてやまない。國家は、その効果として生成せられ

た國法であり、また同時に、その國法の規範力としての權力である。

もとより、民族は、更に世界の中で、互に分裂して存在し、民族を越える世界的生産關係の中で、分裂的意識をなしているが、この民族的分裂意識は、世界的生産關係を反映する世界的統一意識の存在を無視し得ない限り、そこに國家政治と並ぶ國際政治の存在を認めなければならない。

それと同時に、國家内部においても、民族統一に對する、いろいろの階級的分裂的對立を反映する意識に立つところの、いろいろの政治的陣營が成立する。それが各々、政治的實踐の陣營として、政治意識を實踐する主体的勢力となる。

由來、人類生活の原始形態は、種族的であつて民族的でなく、また自足的民族平等關係であつて階級的ではなかつた。民族と社會階級の生成によつて、はじめて人類の政治社會が出現してきた。

人類原始生活の、かような發展の因果法則は、「血緣の法則」であつて、それは性生活の經驗上、成立した血族婚姻の禁忌の法則であつた。

血族婚姻の禁忌は、ルイス＝モルガンの示す事例によれば、マライ族を經て、プナルア族において現われ、トゥラニヤ及びガノワニヤ族において、漸く確立したけれども、いまだ合理的ではなかつた。

兄弟姉妹團婚制の下では、母系が正確なだけで、父系はいまだ不正確であつた。そこで血族婚姻禁忌は、更に發展して、モルガンのいわゆる對偶婚のような、一人の母が暫定的に一人の父を占有する形態に發展しなければならなかつた。しかし、それは、一人の父を中心とするポリガミーの成立に至る過渡的段階たるにすぎない。ポリガミーにお

いて、はじめて、血族婚姻禁忌の法則が完成するに至つた。

かくして血族婚姻禁忌の因果法則は、遂にポリガミーにまで至ることを要求している。この族父制大家族制度の成立によつて、はじめて大家族制下における一人の族父の支配と責任が發生し、自足生活が崩れて、分業と交易による餘剰生産と餘剰勞働の必要が發生してきた。これが社會階級の生長を促し、階級社會の內面的矛盾による、種族の種族に對する戰鬪及び征服を喚起し、一種族の他種族に對する支配形態としての民族統一社會を生成せしめた。原始的種族鬪爭は、種族的內面秩序の中における族父制度の出現と、それによる分業と交易の促進と、更にそれによる社會階級の成立を反映するものであつたといわなければならない。

その後、國家の歷史は、絕えず政治形態の變遷を記錄しているのであるが、それは、要するに、この民族と階級の變轉史に外ならない。

したがつて國家と、それを成立せしめている政治意識は、民族と階級の存續する限り、解消しないであろう。しかし、そのことはまた同時に、民族と階級の解消が、政治の解消であり、國家の消滅であることを物語つているであろう。それは世界社會の完成である。そこでは政治意識は不要である。

かような意味において、われわれは、政治現象を考えるのであつて、これを研究の對象領域とする社會科學をもつて、「政治科學」とするのである。

（一九四九・一二・一〇）